

Global studies第6号： 表紙,執筆要綱,執筆者一覧,奥付

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1708

GLOBAL STUDIES

グローバルスタディーズ

6

2022

研究論文

- 1 日華学堂出身の学生たちの通訳活動—呉汝綸の教育視察を中心に— 樂 殿武
- 23 日本人のマスク着用率と個人主義・集団主義— 古家 聡
- 37 債務超過状態にある企業における株主還元策の妥当性—米国マクドナルド社の場合— 高橋 敦
- 55 Envisioning Chinese as a Global Language — Albert R. Zhou
- 71 Using English as the Corporate Language in the Context of Japanese Firms — Connie Chang・Yu-Hsu Sean Hsu
- 79 東アジアにおける金融セーフティー・ネット—金融危機防止に向けた最近の進展と課題— 渡邊 賢一郎
- 95 在日中国人留学生のライフストーリーにみる無意識の差別—マイクロアグレッションという視点から— 劉 薇・石黒 武人
- 115 中日模糊限制语的评价意义研究—以新冠肺炎疫情话语为例— 卢 琳

調査報告

- 129 コロナ禍における日本語教師と授業のオンライン化 — 藤本 かおる

研究ノート

- 149 観光入込客数の推移からみる危機からの復活傾向と観光地の特性 — 岩崎 比奈子・山田 雄一
- 163 公開音楽バラエティー『レッツゴーヤング』出演者衣装の分析—1980年代のテレビメディア資料群による服飾文化研究の可能性と課題点— 江良 智美

世界の幸せをカタチにする。

Creating Peace & Happiness for the World



武蔵野大学グローバルスタディーズ研究所

武蔵野大学 グローバルスタディーズ研究所紀要
Global Studies 執筆要領

2022年1月6日版

1. 投稿資格

グローバルスタディーズ研究所の研究員および客員研究員、大学院言語文化研究科、グローバル学部の科目担当教員（非常勤講師を含む）、大学院言語文化研究科の大学院生および修了生とする。また、以下のいずれかに該当する者は、グローバルスタディーズ紀要編集委員会で認められた場合に限り投稿することができる。

- (1) 本研究センター専任教員と共同研究に従事する者
- (2) 紀要編集委員会が特別に依頼した者

原稿は未発表のもので、1人1編とする。共同研究の場合は1人2編までとするが、筆頭者としては1編しか投稿できない。

2. 使用言語

日本語、英語、中国語のいずれかとする。

3. カテゴリー（各カテゴリーの内容については「投稿に関する留意点」を参照のこと）

- ・研究論文
- ・展望論文
- ・実践報告
- ・調査報告
- ・研究ノート

4. 原稿作成上の注意

(1) 原稿の様式と分量

- ・編集委員会指定の Word のテンプレートを使用する（行間やフォントなどを自分で変えない）。
本文は、MS 明朝/Times New Romans,10.5pt
各章の見出しは、MS ゴシック 12pt（章の見出しのみ行間を段落 1.5 行とする）
節・項の見出しは MS ゴシック 11pt
- ・分量は、日本語・中国語原稿の場合は、20000 字以内、英語原稿の場合は、8000 語以内とする（注、参考文献、図表を含む）。
- ・B5 判で製本されることを考慮し、図表等の縮小率に注意すること。原稿とは別に、解像度の大きなものを別途提出すること。

(2) 表記法（日本語）

- ①日本語は常用漢字、現代仮名遣いを原則とする。
- ②数字は原則として半角アラビア数字とする。ただし、「一切」「四半世紀」などの熟語、成句、固有名詞に限って漢数字を使用する。
- ③句読点は「、」「。」を使用する。

④句読点、「」、() は全角で使用する。

(3) 論文タイトル

日本語原稿には日本語のメインタイトル (MS 明朝 18pt、サブタイトルは 14pt) の下に英語タイトル (Times New Romans ・ 14pt) を入れる。英語原稿・中国語原稿にはそれぞれの言語のメインタイトル (Times New Romans ・ 18pt、サブタイトルは 14pt) の下に日本語タイトル (MS 明朝 14pt) を入れる。

(4) 氏名 (MS 明朝 Times New Romans 12pt)

漢字の氏名は文字と文字の間に半角スペースを入れる

(5) キーワード (MS 明朝 Times New Roman ・ 10.5pt)

キーワードは 5 語以内とし、論文タイトル、氏名の下に記載する。

(6) 文中の引用

- ・単著文献を引用する際には、加藤 (2007) あるいは、加藤 (2007, 2009) のようにする。筆者名と出版年をかっこに入れるときは、(加藤, 2009) とする。
- ・複数の文献を引用する際には、(加藤, 2007; 宇佐美他, 2019; Erlam, 2005) のように名前の後に半角コロン+半角スペース、半角セミコロン+半角スペースとする。
- ・引用元のページは、加藤 (2007: 19) のように、半角コロン+半角スペース、掲載ページを入れる。
- ・同一筆者による同じ年に出版された文献は、「加藤 (2009a)」「加藤 (2009b)」のように、年のあとに a, b...を入れて区別する。

(7) 謝辞・注 (MS 明朝 Times New Roman ・ 9.5pt)

注は本文中に上付添字で 1) 2) 3) ... と通し番号で示し、原稿末尾の参考文献の前にまとめる。ワードの脚注機能は使用しない。

(8) 参考文献 (MS 明朝 Times New Roman ・ 9.5pt)

参考文献は謝辞・注の下にまとめる。以下の書式で統一する。

- ・和文書籍
加藤周一 (2007) 『日本文化における時間と空間』岩波書店
レイヴ, ジーン・ウェンガー, エティエンヌ (1991), 佐伯胖 (訳) (1993) 『状況に埋め込まれた学習-正統的周辺参加』産業図書
- ・和文論文
石井敏 (2001) 「現代社会と異文化コミュニケーション」石井敏・久米昭元・遠山淳『異文化コミュニケーションの理論 新しいパラダイムを求めて』有斐閣ブックス, 1-7.
宇佐美洋・森篤嗣・広瀬和佳子・吉田さち (2009) 「書き手の語彙選択が読み手の理解に与える影響—文脈の中での意味推測を妨げる要因とは—」『日本語教育』140, 48-58.
- ・英文書籍

Ellis, R. (2003) *Task-based Language Learning and Teaching*. Oxford: Oxford University Press.

・英文論文

Langacker, R. W. (2006) On the continuous debate about discreteness. *Cognitive Linguistics*, 17, 107-151.

MacWhinney, B. (1989) Competition and connectionism. In B. MacWhinney & E. Bates (Eds.),
The crosslinguistic study of sentence processing (pp. 422-457). Cambridge University Press.

・ウェブの資料

文部科学省 (2019) 大学等におけるインターンシップの実施状況について.

https://www.mext.go.jp/b_menu/internship/1387151.htm (2020年1月1日)

(9) 所属 (MS 明朝 Times New Roman ・ 10.5pt) 右寄せ

学部 ・ 学科 ・ 職位等を原稿末尾に記載する

5. 抜刷り

抜刷りは一論文に対して 30 部とする。不要の場合は、エントリーシートに希望しない旨記載する。

6. 原稿提出期日他スケジュール

年 1 回、委員会の定める期日までに提出する。

7. 原稿提出方法および提出先

原稿は、武蔵野大学グローバルスタディーズ研究所紀要編集委員会 (gs_edit@musashino-u.ac.jp) 宛に、電子データをメールにて提出する。

8. 提出原稿の校正

著者校正は 2 回までとする。校正段階での原稿の大幅な訂正、加筆、削除は控える。

以上

執筆者一覧 (掲載順)

【研究論文】

樂 殿 武	Hirotake Ran	グローバル学部グローバルコミュニケーション学科 教授
古 家 聡	Satoru Furuya	グローバル学部グローバルコミュニケーション学科 教授
高 橋 敦	Atsushi Takahashi	グローバル学部グローバルビジネス学科 教授
チョウ アルバート	Albert R. Zhou	グローバル学部グローバルコミュニケーション学科 教授
張 巧 韻	Connie Chang	グローバル学部グローバルビジネス学科 准教授
許 佑 旭	Yu-Hsu Sean Hsu	グローバルスタディーズ研究所 客員研究員
渡 邊 賢一郎	Kenichiro Watanabe	グローバル学部グローバルビジネス学科 教授
劉 薇	Liu Wei	言語文化研究科言語文化専攻修士生・パナソニック株式会社 社員
石 黒 武 人	Taketo Ishiguro	立教大学異文化コミュニケーション学部 准教授
卢 琳	Lu Lin	グローバルスタディーズ研究所 客員研究員・ 大連外国語大学東北アジア研究センター 博士後期課程在学中

【調査報告】

藤 本 かおる	Kaoru Fujimoto	グローバル学部日本語コミュニケーション学科 准教授
---------	----------------	---------------------------

【研究ノート】

岩 崎 比奈子	Hinako Iwasaki	グローバル学部日本語コミュニケーション学科 専任講師
山 田 雄 一	Yuichi Yamada	公益財団法人日本交通公社 主席研究員
江 良 智 美	Satomi Era	グローバル学部日本語コミュニケーション学科 非常勤講師

Global Studies 第6号

2022年3月1日発行

編 集 武蔵野大学グローバルスタディーズ研究所紀要編集委員会

発 行 武蔵野大学グローバルスタディーズ研究所
〒135-8181 東京都江東区有明3-3-3
電話 03-5530-7312

印 刷 株式会社ワコー
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-11-7
電話 03-3230-2511

GLOBAL STUDIES

グローバルスタディーズ

6

2022

RESEARCH ARTICLES

- 1 A Study of Interpreting Activities of Students from Nikka School during the Educational Inspection by Rulun Wu — Hirotake Ran
- 23 Japanese People's Wearing Face Masks and Its Relationships with Individualism and Collectivism — Satoru Furuya
- 37 Appropriateness of Shareholder Return Strategy of Companies with a Negative Book Value—The Case of McDonald's Corporation — Atsushi Takahashi
- 55 国際語としての中国語の現状及び未来に関する一考察 — チョウ アルバート
- 71 日本企業における英語の社内公用語化について — 張 巧韻・許 佑旭
- 79 The Financial Safety Net in East Asia: Recent Developments and Challenges for Preventing Financial Crises — Kenichiro Watanabe
- 95 Unconscious Discrimination Seen through Life-stories of Chinese International Students in Japan: From the Viewpoint of Microaggression — Liu Wei・Taketo Ishiguro
- 115 中日のヘッジ表現に関する評価意義の研究 — COVID-19 ディスコースを中心に — 卢 琳

SURVEY REPORTS

- 129 Japanese Language Teachers and Online Classes during the COVID-19 Pandemic — Kaoru Fujimoto

RESEARCH NOTES

- 149 Tendency to Recover from the Crisis and Characteristics of Tourist Destinations, Seen from Changes in the Number of Tourists — Hinako Iwasaki・Yuichi Yamada
- 163 Analysis of Performers' Costumes in the Music Variety TV Program "Let's Go Young": the Possibility and Issues in Researching Clothing Culture, Using 1980s Television Media Resources — Satomi Era

世界の幸せをカタチにする。

Creating Peace & Happiness for the World



Musashino University's Institute for Global Studies